



ギター



来間タロー

液晶テレビ、パソコン、スマートフォン、タブレット等を製作するのに欠かせない工業部品メーカーFLASH INC.が静岡県にある。この会社は、世界トップシェアを長年維持している業界最大手の電機メーカーである。

ここ数年、スマートフォンやタブレットの爆発的な売れ行きでFLASH INC.も増収増益。経営者にとってはウハウハであるが、研究開発部門にとっては次世代製品の開発を急かされる。また、コンペティター(競合他社)の追撃を蹴落とす為、日夜試行錯誤の連続であった。

そして、FLASH INC.の開発部門で最も過酷と噂される製品開発部第二G(グループ)へ新人が配属された。

新人を配属先へ案内する人事部担当者は、工場敷地内PHSで、配属先のGL(グループリーダー)へ連絡をとっていた。

「裾野GL、これから新人を連れて行きますので よろしくをお願いします。」

「あー、解った。」

配属先の製品開発部第二Gのドアの前に着くと、人事部担当者はカードキーでセキュリティーロックを解除し、新人と共に入室した。

そこは、各開発テーマ毎に十畳一間単位で仕切りが設けられており皆黙々と実験やデータ解析を行っていた。この風景に新人は、内心こう思った。

「なんだコレ、まるで強制収容所じゃなか。」

新人が思い描いていた華やかな研究所とは違い、従業員は何か追われるように思いつめ、実験にとりくんでいた。近くに新人が来ている事など、気付く余裕すら無かった。

「裾野GL、今日から配属になります富士岡君です。」

「始めまして、富士岡です。宜しくお願いします。」

「ああ、君の専門は？」

「電子工学です。」

「そうか、ま、大変だとは思いますが頑張ってくれ。」

「じゃ、裾野GL、私はこれで失礼しますので、後はお願いします。富士岡君、頑張れよ。」

「はい、ありがとうございました。」

人事部担当者が退室した後、裾野は富士岡を連れて室内を案内して回った。

室内では安全の為、作業帽に保護眼鏡、安全靴の着用が義務付けられていた。

まず最初に訪れたブースには、1mX1mX1m程の金属製BOXらしき物があり、作業者は黒いサングラスを掛けていた。そして、金属製BOXの下には何やら紫色の光が漏れていた。

「あの光は紫外線だから見ないように。」

「この装置は何ですか？」

「紫外線露光装置の一部だ。中には特定波長の紫外線が出るランプが入っていて、作業者は光エネルギーの測定をやっている。定期的に測定を行い、エネルギーの経時劣化率を調べているんだ。ま、いわゆるランプのライフテスト(寿命試験)だな。」

「ランプの評価をするのですか？」

「ランプは他社製で、使う品種は決まっているのでランプの評価はしない。光学レンズやミラーを通過した光の均一性や安定性といった光学系の評価しているんだ。」

次に訪れたブースには、ビールケース程のサイズで、電子部品が詰め込まれた装置があり、作業者はオシロスコープを使って何やら考えていた。

「ここはランプを点灯させる電源を開発している。」

「電源は、ああいう風に電子部品が見える状態で出荷するのですか？」

「いや、実験中だけだ。出荷時にはカバーをする。君はオシロを使えるよな？」

「はい、何度か使った事があります。でも、よく見ると僕が学校で使っていたオシロより新しくコンパクトですね。使い易そうです。」

「今日からここが君の職場だ。いきなり一人での作業は無理だろうから、一ヶ月程は先輩の弟子として指導を受けるように。」

「はい、承知しました。」

「新人の富士岡君だ。しっかり鍛えてやってくれ。」

「はい。」

「富士岡です。宜しくお願いします。」

裾野は、足早に自分の持ち場へと帰って行き、そのブースには二人だけが残された。

「早速だが、ICチップのハンダ付けをやってくれ。やった事はあるか？」

「はい、ハンダ付けは、得意です。お任せください。」

富士岡は、得意気にハンダ付けを始めたが、思うようにいかず苦戦していた。

「どうした、ルーキー。得意じゃなかったのか？」

「それが、いつものハンダとは溶ける温度が違うようで、でも大丈夫です。もう解りました。」

「やるじゃねえか。富士岡が学校で使っていたハンダは、おそらくカドミ入りのスタンダードタイプだろう。コレは、環境や人に優しいカドミレスタイプだ。カドミの有無で融点が違ってくる。」

「なるほど。」

「随分手馴れた様子だが、ハンダ歴何年だ？」

「12年程です。」

「へえ、大したモンだ。確かに綺麗にできているし、早い。」

「イヤー、小学三年生の頃から遊びでやってたもので。」

「ほう、随分と幼い頃から鍛えられたんだな。電子工作キットとか買って貰ってたのか？」

「いえ、粗大ゴミの家電製品とか要らなくなったパソコンを分解したり、意味も無くデタラメにハンダ付けして遊んでるうちに、覚えました。」

「凄いじゃないか。お前、どこの学校出たんだ？」

「大山高専です。パソコン部品の設計とか研究をやりたくて進学しました。」

「国立の高専か、ウム、即戦力として期待しているぞ ギーク！」

「えっ？ギ、ギーク？何ですか、それ？」

「パソコンについて深い知識と技能を持ったオタクマニアの事だ。お前にピッタリだろう。」

「ええ、まあ、否定はしませんが。」

こうして富士岡は、得意分野を発揮出来る部門へと配属され、期待を背負って仕事を始める。この時富士岡は、高専を卒業したばかりの20歳。その後、日夜努力と試行錯誤の日々が続き、気が付けば五年が過ぎていた。

ロンリーハートに咲く花

富士岡が入社して五年目の夏、電源設計も一人で任されるようになっていた。パソコンのCADを使って電子回路を設計し、各パーツを自分で組み立て電源を試作する。そして試作品の評価を行った結果、OKなら正式に製品として客先に納入出来る。

実験評価中、問題がクリア出来ない場合は悩み苦悩する事が多い。思えば、五年前の配属初日に見た苦悩する先輩達の姿と同様の姿に富士岡もなっていた。

毎週金曜日の午後からは、グループミーティングが開かれ、各人がそれぞれの開発テーマについて発表する。計画通り進んでいれば良いが、遅れていたり問題がクリアできていなければ上司からこっぴどく絞られる。問題の原因さえ解らなかつたり、いつ頃解決出来るかの目処も立たない場合は、人事考課に大きく影響する。

富士岡は、自分のテーマについて計画通り進んでおり、課題もクリアし順調だと発表した。ところが、思いもよらない質問が飛んできた。

「電源サイズをもっとコンパクトに出来ないか？」

「これでも従来型より約25%縮小していますし、ユーザー要求サイズは満たしていますが、」

「それはさっき聞いた。もっと小さくならんのかと言ってるんだ。」

「現段階では何とも言えませんが、更にコンパクトにする理由は、何でしょう？」

「コンペティターと差別化する為だ。ユーザー要求サイズでは他社と同じだ。他社製品と比べてコンパクトであり、軽量でなくてはならない。ユーザー要求品質は、満足して当然だ。次回までに考えてこい。」

「はい、解りました。」

今朝まで順調と思っていた仕事が、一瞬にして課題を上乗せされてしまった。コンペティターに勝ち、自社が生き残っていくにはよくある現象である。富士岡は、すっかり落ち込んでいた。

「まいったな。設計を一からやり直しだよ。」

休憩時間にコーヒーを飲む富士岡に同期入社沼津が声を掛けてきた。

「よ、富士岡。元気、、、じゃなさそうだな。」

「お、沼津。お前は、いつもパワフルだな。」

「あたりめーだ。営業マンが元気なくて、製品が売れるか！」

「そのエネルギーを少し分けて欲しいよ。」

「よし、じゃ今夜エネルギーを補充しに行くか？」

「何処へ行くんだ？」

「俺が仕事でよく行く店だよ。」

「飲み屋で仕事するのか？」

「営業マンの場合、客の接待も立派なビジネスなんだよ。で、その店にはカワイイ娘が居るん

だよ。」

「営業って楽しそうだな。」

「お前の場合、ずーっと考えてばかりだから、たまにヤスカッとガス抜きした方が良い仕事が出るぞ。どうする？行くか？やめるか？」

「い、行く。」

「ヨシ、決まり。何時頃退社出来る？」

「うーん、10時ぐらいかな。」

「解った。じゃ、俺先に行って飲んでるから、駅に着いたら電話くれ。あんまり遅いと女の子が帰っちゃうぞ。」

「おう、なるべく早く切り上げるよ。」

夜9時も過ぎ、富士岡は、先輩達に挨拶をして退社した。そして、駅前の牛丼店で腹を満たした後、沼津へ電話した。

「あ、富士岡だけど。」

「おー、お疲れ。思ったより早かったな。早退か？」

「バカ言え。やるべき事は終わった。それより、どう行けばいいんだ？」

「そこから東へ200m程行くと、コンビニがある。その次の信号を左に折れて、三つ目の路地に入るとバーやスナック店が立ち並んでいる。そこのスナック ダウンヒルにいるから。」

「解った。すぐ行く。」

富士岡は、10分程で店に着き中に入った。中には、カウンター越しに女性と楽しそうに会話をする沼津の姿があった。

「おー、やっと来たか ギーク。」

「いらっしゃい。お待ちしてました。」

カウンターの女性は見事な営業スマイルで、富士岡にお絞りを渡した。

富士岡は、はにかんだ固い笑顔で挨拶をして席に座った。

そして、しばらくの時間 富士岡と沼津が会話をしていると、カウンターの奥で食器洗いをしていた女性が呼ばれた。「アンタ、あの人の接客してみな。」

「はい、解りました。」

「ね、ね、沼津さん。今日から新しい子が入ったんだよ。」

「泉です。よろしくお願いします。」

「あ、カワイイじゃん。俺、沼津。よろしく。で、コイツはギーク。売れないミュージシャンなんだ。」

「誰がミュージシャンだ。俺、富士岡。沼津と同じ会社員です。よろしく。」

「富士岡、お前ラッキーだな。初めてこの店に来たのに、こんなカワイイ子に会えて、」

「沼津さん、泉の事が随分気になるのね。沼津さんにはアタシが、い、る、で、しょ！」

「は、はい。」

泉は、富士岡がオーダーした水割りを目の前で作り差し出すと、富士岡は一口飲み、泉と二人で話しを始めた。

「あ、泉さんが作った水割り すごく美味しい。」

「ホント？良かった。失敗したら叱られるから。私、こういう仕事 今が初めてなんです。」

「お、俺もスナックに来たの今日が初めてなんだ。だからそんなに緊張しなくていいよ。」

「ありがとうございます。ギークさんは、何でギークってアダ名なの？」

「え、えーと。その、あんまり嬉しくないアダ名だけど。パソコンのオタクマニアの事らしいんだ。」

「へえー。ゲームとかよくやってるの？」

「いや、俺はソフトよりハードの方が専門だからほとんどやらない。」

「コンタクトレンズが専門なの？」

「ちがーう。ソフトっていうのはプログラムを作ったりするやつで、ハードは電子回路で、、、」

富士岡は、クドクドと専門的な話や仕事内容を話すので、泉は困りはて重い空気が漂っていた。これに見かねた沼津は、助け舟を出す。

「コラ、ギーク。つまらん話をするから場がギークシャクしてるだろ。」

重い空気が更に重くなり、カウンターはシーンと氷ついた。

「富士岡さん、飲み物は？」

「あ、じゃ、スコッチのロックを貰おうかな。」

泉が氷入りのグラスにスコッチを注ぐ仕草に富士岡は見とれていた。そして、泉が差し出したグラスを受け取る時 富士岡の指が泉の指に触れた。泉は富士岡の視線を感じ、少し照れている様子であった。富士岡がグラスを口に運ぶと、ワイングラスに立てられた数本のポッキーが運ばれてきた。泉はポッキーを一本取ると、富士岡の口元に近づけた。

「富士岡さん、アーンして。」

富士岡は、恥ずかしがりながら口を開き、ポリポリとかじっていくとポッキーは段々短くなり、やがて富士岡の唇は、泉の人差し指に触れた。

「こんな美味しいポッキーは、生まれて初めてだよ。」

「あははは。本当に？」

「勿論！あの、おかわり。」

「うーん、じゃ、はい、どうぞ。」

富士岡は、一瞬目を疑った。おかわりのポッキーは、泉の唇で差し出されていたのだ。何が起こったのか解らず、2~3秒悩んだ富士岡は、勇気を振り絞り泉に聞いてみた。

「こ、これ食べていいの？」

「ふん。(うん。)ふははいお?(要らないの?)」

「いる!いただきます。」

富士岡は、小刻みにかじるのではなく、なるべく長くかじった。そうした方がより泉の唇に近づけると考えたのだ。しかし、最初の一噛みでポッキーは折れ、泉の唇へは届かなかった。残るポッキーはあと一本。ラストチャンスに願いを込めて挑んだが、またしても目標未達に終わった。照れながら真剣に悔しがる富士岡を見た泉は、しばらくの間笑い続けた。

「富士岡さんて面白い人ね。あー、可笑しい。こんなに笑ったの久しぶりよ。」

「何だよー。俺はショックだよ。」

楽しい時間は経つのが早い。気が付くと夜中2時を過ぎていた。この店のリミットだ。

「富士岡、そろそろ帰るか。」

「えっ、もうそんな時間?」

「まるで竜宮城に来た浦島太郎だな。また今度来ればいいじゃんか。」

「あー、解った。帰るよ。」

富士岡は、まだ泉と一緒に居たかったが、あまり長居をして嫌われるのを恐れて帰る事にした。勘定を終えてドアの外まで見送りに来た泉の表情が、富士岡には切なく思えた。

店を出て駅まで歩く帰り道、沼津が富士岡に語り掛けた。

「富士岡、どうだ、楽しかったろう?」

「ああ。」

「ってお前、あまり本気になるなよ。所詮、スナック遊びだからな。」

「ああ。」

「店で飲んでる時間だけ恋人気分にしてくれるリアルバーチャルみたいなモンだ。来週からまたバリバリ働こうぜ。」

「ああ。」

「さっきから、あー、あー、ってお前人の話聞いてんのかよ!」

「ああ。」

「ふ、富士岡。お前マジで、、、」

「泉さんて、いいなー。」

「馬鹿!辞めとけ。ありゃ全部演技だよ。お前を虜にして店に通わせ、そんで貢がせて、金全部吸い取られるぞ。目を覚ませ!」

「泉さん、、、」

「駄目だ、こりゃ。俺知らねーぞ。」

泉にすっかり骨抜きにされた富士岡は、フニャ男とかダサ男とか言うよりグニャ男という名がピッタリだった。富士岡を元気付ける為に店に連れて行ったのだが、結果的に泥濘にはめてしまった。沼津は、すまないという後悔とこれからどうなるんだろうという期待を抱いていた。

今まで女性とロクに会話をした事が無かった富士岡は、始めてトキメキを覚えた。一人ぼっちの心に一輪の花が咲き、自分が恋をした事に未だ気付いていないギークであった。

月曜日の昼休み 富士岡がメールをチェックしていると沼津からのメールがあった。その内容は、金曜日の夜の出来事は夢だ。現実に戻れというものだった。富士岡は沼津に返信した。

「心配するな。その辺は解ってる。気分がリフレッシュして頭の回転が良くなった。」

富士岡からの返信メールを読んだ沼津は一安心した。。。がしかし、沼津の心配を他所に富士岡は今週金曜日にも店に行こうと固い決意を抱いていた。金曜日の夜が待ち遠しく、それまでに今週予定している仕事を絶対に終わらせるんだという熱い情熱が周囲にも伝わっていた。

そして、待ちに待った金曜日の夜 8時過ぎ。富士岡は、仕事を終えた。

「さー、終わったぞ。」

「富士岡、今週はヤケに気合い入っとるな。何かいい事があったのか？」

「裾野さん、特に何かあった訳じゃないですが、今日はこれで失礼して良いですか？」

「何も無いのに、あんなに気合い入るか！そんなにウキウキするか！金曜日に早く帰りたがるか！正直に言え！女ができたのか？」

「いえ、未だ彼女はいません。今日は、その、、合コンでして、、、」

「やっぱり女絡みじゃねえか。ま、良いだろ。仕事が計画通り進んでるようだしな。」

「はい、お先に失礼します！」

「お疲れー。頑張れよー。」

半笑いで退社した富士岡は、先週と同じく駅前の牛丼屋で食を済ませ、店に向かおうとした。

「未だちょっと時間が早いな。開店まで、あと10分ぐらいある。ま、いいか店の前で開くまで待ってよう。」

そう思い、富士岡は店に向かった。次の角を曲がれば、店が見えてくる。店の中には泉が居る。心を弾ませながら、角を曲がった時、人とぶつかった。

「きゃっ！！すみません。」

「いえ、こちらこそ、すみ、、、あ！泉さん！」

「富士岡さん。」

富士岡の前にいるのは、先週の明るい笑顔の泉ではなく、悲しい泣き顔の泉だった。

「泉さん、ど、どうしたの？」

「私、ついさっきお店をクビになったの。」

「えー、何で？」

「実は、昨日テーブル席で接客してたらお客さんが私の脚を触ってきて、、、」

「えっ、あの店 お触り禁止じゃ、、、」

「うん、そうなんだけど、そのお客さんは常連客だから我慢しろって言われて、、、」

「ひどい話だ。」

「それで、黙ってたら段々エスカレートしてきて、やめてよっ！て言ったらお客さんが怒って帰

「ちやたの。その事が支配人に知れて、クビだ！出てけっ！て言われたの一。」
「なにい〜、とんでもない話だな。そんな店 辞めて正解だよ。我慢するだけ損だ。」
「富士岡さんて、優しいのね。」
「いや、あの、その、、」
照れる富士岡を見て、今まで泣いていた泉は、少し落ち着きを取り戻してきた。

「富士岡さんは 何でここに？」
「俺は、その あの店に飲みに行こうとしてたんだけど、、、、」
「今から行くの？」
「行かないよ。泉さんがいない店に行っても面白くないし。それに、あの店は近く潰れるな。」
「何でそう思うの？」
「あの店、看板娘の泉さんを追い出したら 他にカワイイ娘いないじゃんか。」
「あはは、アリガト。嘘と解ってても嬉しいよ。」
「嘘なんかじゃないよ。本当にそう思ってる。」

しばらくの間、会話が途切れ 泉は下を向き、何かを伝えようとしているが言い出せずにいる。すると富士岡が声を掛けた。

「どうしたの？」
「あのね、私、お店を追い出されたから、もう帰るところが無いの。」
「えっ？そうなんだ。家が遠くにあるんだね。」
「そういう訳じゃ、、、、」
「あ、あの、もし良かったら ウチに来ない？」
「で、でも一。迷惑じゃない？」
「全然迷惑じゃない。俺、一人暮らしだし、泉さんなら大歓迎！」
「うーん、じゃ、お言葉に甘えて、お邪魔します。」
「ヨシ、決まり！」

富士岡の住むマンションに着くまでの間、会話が少なかった。まだお互いの事をほとんど知らない二人である。泉は富士岡の家に行っても大丈夫だろうかという不安と警戒心を持っていた。また、富士岡はつい勢いで誘ってしまったが、自分の泉に対する気持ちがバレてないだろうか。いつもこんな風に女の子を家に誘っていると誤解されてないだろうか。そんな事を心配していた。

自分の部屋に着き、富士岡はドアを開けた。
「さ、どうぞ。」
「おじゃましまーす。」
「ちょっとだけ、ここで待っててくれる？部屋を片付けるから。」

「うん、解った。」

玄関に入るなり、富士岡は奥の部屋へ行き、ゴソゴソと片付けて戻ってきた。

「お待たせ、さ、上がって。」

「はい。」

富士岡の部屋は、玄関を入るとフローリングの廊下があり、横にはバス、トイレがあった。そして、キッチンがあり、その奥は八畳程のリビングと四畳半の和室があった。

「結構広くて良い部屋ね。」

「ま、座って。コーヒーか紅茶どっちがいい？インスタントだけど。」

「じゃ、紅茶お願い。」

「ガッテンだ！」

「あはは、寿司屋みたい。」

とりあえず、緊張を解く為に富士岡は明るく振舞った。普段の自分では無い事も自覚していた。そして、紅茶を作りテーブルに置くと泉の向いのソファに座った。

「どうぞ。」

「い、いただきます。」

紅茶を二口程飲むと、泉から話始めた。

「この部屋 結構高いんじゃない？」

「まともに借りたら8万5000円だけど、会社の借り上げ寮扱いだから 実質2万円の給料天引きだよ。」

「ふーん、これで2万円。いい会社ね。」

「それ程でもないよ。」

「富士岡さんて、先週初めてお店で会った時はまるで子供みたいって思ったけど、こうして見ると意外と立派に見えるから不思議ね〜。」

「ず、随分ストレートに言うね。結構、キズ付いたよ。」

「あっ、ごめんなさい。ところで、富士岡さんて幾つですか？」

「ん？俺のコーヒーには入れてないけど。」

「砂糖の数じゃなくて、年齢！年！何歳？」

「あ〜、今25。」

「エーッ、私20〜22, 23だと思ってた。」

「うーん、喜んで良いのやら、、、泉さんは何歳？」

「17」

「じゅ、じゅーしちって。今時アイドルでもそんなサバを、、」

「しっつれーね！正真正銘セブンティーンよ。」

「ほ、本当に？」

「本当よ。」

「って事は、高校生でスナックでバイトしてたの？」

「高校は事情があって今年辞めたの。」

「そ、そうなんだ。」

富士岡は、自分が想像していたより泉が若い事に驚きと戸惑いを隠せなかった。

「ところで、帰るところが遠いって言ってたけど、実家は何県？」

「あの～、実は私、家出中なの。」

「いっ、家出！？」

「うん、家出中。悪い？」

「あ、あんまり自慢出来る事じゃ、、」

次の瞬間、泉は急に表情が険しくなり怒り出した。

「何よ！人にはそれぞれ家庭の事情があるのよ！それも知らないで歪んだ目で見ないで！」

「あ、ごめん。偏見だった。良かったら事情を聞かせてくれないか？」

泉は、少し間を開けると涙をこぼした。そして、意を決して話し始めた。

「私が出した原因はお父さんの。お父さんは従業員三人程の小さな町工場を経営してるんだけど、ここ数年赤字続きで家計も苦しかったの。経費削減の為に私も工場で経理や事務の仕事をやらされて高校も休む事が多くなって、それでクラスにも馴染めず高校辞めちゃった。で、お父さんは、休みの日は昼間からお酒を飲んでお母さんや私に絡んで来て、酷い時には暴れたりして、、」

「そうだったんだ。かわいそうに。」

「お父さんがいると、とても怖くて、、、、」

「辛かったろうな、泉さん。でも、もう心配ないよ。ここに居れば大丈夫。今夜はココに泊まって行けばいいよ。」

「い、いいの？泊めてもらって？」

「勿論。あ、部屋は分けるから安心して。」

「ありがとう。富士岡さん。」

この夜、泉は富士岡の部屋に泊まった。四畳半の寝室は富士岡が寝て、泉はリビングで寝る事になった。通常、お客が寝室なのだが、いつも富士岡が寝ている布団で寝るのに抵抗を感じた泉はリビングを選んだ。

床についた富士岡はなかなか眠れず、先週初めて泉と出会った時の事を思い出していた。泉の明るい笑顔、初めて触れた泉の指、息が掛かるような距離にあった泉の顔、そしてあと3cmまで近付いた泉の唇。今まで、女性と話す機会も少なくデートすらした事がない富士岡は、この夜間違いなく泉に恋をしていると確信した。

今、自分の好きな人が隣の部屋で泣いている。どうにかして助けたい。でも、自分に何が出来るのか、何をすれば泉の力になれるのかを考えていると、リビングから泉の寝息が聞こえてきた。それを聞いた富士岡は、少し安心してしばらくすると眠りについた。

二人の部屋

泉が富士岡の部屋に泊まった翌朝、富士岡が目覚めると泉は既に起きているようだった。キッチンの方から何やら音がするので行ってみると、泉が朝食を作っていた。

「あ、富士岡さん、おはよう。」

「おはよう、泉ちゃん。」

「あれ、さんからちゃんに変わったの？」

「うん、なんとなくちゃんの方が良いかと思って。」

「うん。実は、さん付けは何か堅苦しいなって思ったの。」

「ところで、朝飯作ってるの？」

「そーよ、冷蔵庫の中にあった物で勝手に料理してるけど、いけなかったかな？」

「いやー、全然OKだよ。でも、中にロクな物がなかっただろ？」

「卵とハムがあったから十分だよ。あと、ご飯と味噌汁。はい、今出来たよ。」

リビングのテーブルには、二人分の朝食が並んだが、なぜか違和感があった。富士岡の分は茶碗やお皿に乗せられているが、泉の分はフライパンにご飯とハムにタマゴ焼き、コップの中に味噌汁だった。

「あ、なんか変だと思ったら、ウチには食器が一人分しかなかったんだ。」

「私のはコレで十分だよ。ね、私も食べていい？」

「勿論だよ。じゃ、いただきますーす。」

「私も、いただきます。」

「うまーい！俺が作ったのと全然味が違う。泉ちゃん、料理上手だね。」

「またー、もう大袈裟ね〜。」

「いや、ホントだって。」

「良かった。実はね、家では家事もやらされてたから、腕には自信あるよ。」

自分が作った料理を美味しそうにガッツいて食べる富士岡を見た泉は、少し幸せを感じていた。

朝食を終えた二人は、仲良く食器洗いをした後、テーブルを挟んで座り話し始めた。

「泉ちゃん、今日何か予定ある？」

「別に予定は無いけど、明日からどうするかを考えないと、、、」

「じゃー、今日俺とデートしない？外出した方が良いアイデアが浮かぶと思うよ。」

「えっ、デート？今から？」

「うん、俺とじゃ、嫌かな？」

「嫌じゃないよ。その、何て言うか、、、」

「気分転換、気分転換。お金の事なら心配しなくて良いよ。」

「あ、はい、じゃ、ご一緒します。」

「ヨシ、じゃ、支度して出掛けよう！」

「うん！」

富士岡と泉は、富士岡の車で近郊の海浜公園にやって来た。規模は小さいが、数十種の乗り物が在り、料金も安いので家族連れやティーンカップル達が多く来ていた。

「さ、泉ちゃん。何に乗りたい？」

「まずは、コレかな。」

「いきなり、絶叫マシンかい？」

「うん、私ね、遊園地は小学三年生以来、来た事がないの。で、当時は小さかったから乗れなかったんだ。だから、乗りたいの。富士岡さんは？」

「実は、遊園地初めてなんだ。絶叫マシンはテレビでしか見たことない。」

「ふーん、じゃ、なおさら乗りたくなかったわ。行こうよー。」

「わ、解ったよ。」

泉は怪しい笑顔で、少し腰の引けた富士岡の腕を掴んで絶叫マシン乗り場へと引っ張って行った。そして、降りてくるなり泉は上機嫌だった。

「あー、気持ち良かった。スカッとしたわねー。」

「そ、そうだな。」

「ぷっ、富士岡さんて結構臆病なんだね。凄く怖がってたよ。」

「そ、そんな事ないよ。初めてだから驚いただけさ。あの程度は、ビギナー向けかな。」

「じゃ、次は、あれが良い。」

「あー、あれ。ハイパージャイロループトルネーダーね。マジっすか？」

「うん、でも富士岡さんが怖いのならやめとくけど。」

「行きましょう！泉ちゃんの為なら喜んで！！」

引き下がる訳には行かないと富士岡は、ヤケクソでハイパージャイロループトルネーダーに挑んだが、降りて来るなりベンチに座り込みヘナヘナになっていた。

絶叫マシンを満喫し、富士岡を散々笑った泉は、自販機で缶コーヒーを買って富士岡に渡した。

「はい、コーヒーどうぞ。」

「サ、サンキュー。今日の絶叫マシンは、これぐらいにしといてやるよ。」

「ぷっ、あはは。じゃ、次っ」

「はい、はい、全く、俺の姫はやんちゃで困るよ。」

楽しい時間が過ぎてゆき、夕暮れ時になっても泉は大はしゃぎで富士岡の手を引き歩いた。いつしか二人は自然と手を繋いでいたのだ。そして、公園内湖のボート乗り場で順番を待っていると、白いアヒルの脚こぎボートが巡って来た。二人並んでペダルを回し進んで行く。しばらくすると、ボートの速度が緩み、泉は富士岡に問い掛けた。

「ね、富士岡さんの子供の頃の話聞かせて。」

「うん、俺、両親が居ないんだ。」

「は？両親が居なけりゃ富士岡さんが存在する訳ないじゃん。どういう意味？」

「俺、物心が付いた時には養子に出されていて、生みの両親が誰だかも知らないし、今どこで何してかも生きてるかどうか知らないんだ。そう、俺、親に捨てられたんだ。」

「嘘、私てっきり恵まれた家庭で何不自由無く育てられたと思ってた。」

「実は親無しなんだ。で、捨てられた事を知った俺は、引きこもりがちになって友達もいなかった。そこで電子工学のエンジニアだった養父は、俺に色々教えてくれた。単に既製品を買ってくれるんじゃなくて、壊れた家電だったり、粗大ゴミのステレオだったり、今まで見た事がない物ばかりだった。それが俺のオモチャであり、教材だった。そして、中学生になった頃、普通科の高校から大学へ進学するより高専に進んだ方が良いつて言われてそうしたんだ。」

「そうだったんだ。なんか暗いつて思ってたけどそういう事だったのね。嫌な事思い出させてごめんなさい。」

「良いよ。いつか話そうと思ってたし、気にするなよ。それに、泉ちゃんと出逢えてから自分でも明るくなつたって分かるよ。」

「じゃ、私が出した事なんて富士岡さんからすれば、単なる甘えに思えるんだ？」

「そんな事ないよ。酷い目にあつたんだろ？いくら親でも、自分の子供に何やっても良いつていう事なんて絶対許されないよ。」

普段温厚な富士岡が怒っているように思えた。泉は自分の痛みを解ってくれる富士岡に心が揺れた。また、富士岡は自分より辛い思いを抱えている事も知った。そして、自分のした事に喜びを感じてくれたり感謝される事に僅かな幸せを感じていた。

ボートが止まり 泉は富士岡の腕にしがみつき、下を向くと涙が富士岡の手に落ちた。

「富士岡さん、私、もうあんなトコに帰りたくないよ。」

「い、泉ちゃん。良かったら、今日も明日もこれからずっと俺の家で暮らさないか？そうすれば、お父さんの暴力に怯えずに済むし、嫌なお店でエロオヤジの接客なんてしなくていいんだ。」

「え、でも、、、」

「俺は、泉ちゃんが好きだ。愛してる。だから、一緒に暮らして欲しい。」

「一つだけ約束して欲しいの。どんな事があっても暴力は振るわないって。」

「約束する！絶対、泉ちゃんに暴力は振るわないって誓う！」

「ありがとうございます。凄く嬉しい。あの、遅くなつたけど、私 三島泉と言います。これからお世話になります。」

「お、俺 富士岡健太郎。ヨロシク。」

「あはは、富士岡さんの言った通りだ。」

「えっ、何の事？」

「明日からどうするかを考えるより、デートした方が良いアイデアが出るよって。」

「そう、そう！やっぱ そうだったろ？俺って天才かも。」

いつしか日は傾き、ボートの正面には海に沈む夕陽があつた。

「綺麗な夕陽ね。」

「ああ。陽が沈んだら帰ろうな。俺と泉ちゃんの二人の部屋に。」

「うん！」

海に沈む夕陽は二人の頬を赤く染め、白いアヒルのボートはフラミンゴのようにピンク色になっていた。その夜、二人は富士岡の部屋で結ばれた。富士岡にとっても泉にとっても、初めての出来事で、二つの体は一つになり、男と女になった。

本当の気持ち

富士岡と泉が結ばれた翌朝の日曜日、二人はほぼ同時に目が覚めた。

「おはよう、泉ちゃん。」

「おはよう、健太くん。」

「け、けんたくんって。なんか子供みたいだな。」

「だって、同棲してるのに富士岡さんはマズイでしょ。健太郎さんじゃ呼びにくいし、健太くんがピッタリだと思うけど、ダメ？」

「ま、いっか。」

「じゃ、健太くん。朝食を作ってきて来るね。」

キッチンに向かった泉の後ろ姿をデレ〜っと見つめる富士岡は、呼び名の余韻を満喫していた。

「健太くんか〜。いいなー。夢なら覚めるなよ〜。」

同棲生活が始まったばかりの初々しい二人は、朝食を食べながら話が弾んでいた。

「ね、健太くん。今日はどうするの？」

「今日は忙しいぞー。いっぱい買う物があるからな。」

「何を買いに行くの？」

「泉ちゃんの食器だろ、歯ブラシとかタオル,布団に部屋着,着替えに寝巻き、それと、、、」

「えっ、買ってくれるの?!」

「勿論、無いと困るだろ。食べたら行くぞ。」

「うん!」

朝食を済ませた二人は、車でドラッグストアまで行き 買い物を楽しんでいた。

「えーと、歯ブラシ,箸にスプーン,フォーク,茶碗,お皿に小鉢と、あと調味料が、、、」

「他に何か要る物は無い？」

「シャンプー欲しい。健太くんのシャンプーだとスカッとする男性用だから女の子にはちょっとねー。あと、リンスもお願い。」

「いいよー。」

ドラッグストアで買う物を全てカートに載せて二人がレジに向う途中 化粧品コーナーを通ると、女子高生三人が楽しそうに品定めをしていた。それを泉は横目でチラッと見つめながら通り過ぎて行った。

「化粧品は要らないの？」

「別にー。要らない。」

「なんか欲しそうに見てたけど...」

「何よ、私の顔は化粧でもしないと見れないって訳？私に化粧して欲しいの？」

「いや、誤解だよ。そういう事じゃなくて、すっぴんでも綺麗です。ハイ。」

「じゃ、何で勧めたの？」

「その、なんとなく泉ちゃんの顔が欲しがってるように見えたから、俺の勘違いかな？」

「もー、健太くん。何で解ったの？」

「あ、やっぱり。」

「私ね、小学二年生の頃、お母さんの化粧品を勝手に使って叱られて以来、今まで化粧したことないの。小さな頃からだんだん大きくなるにつれてクラスの女の子達が化粧し始めるんだけど、私はしなかった。って言うより出来なかったの。」

「えっ、何で？」

「だって、化粧品って結構高いでしょ。買えるお金が無かったし、それにお洒落して出かける暇も無かったの。」

「あの、俺、乙女心は良くわかんないけど、もし、化粧して出かけたいんなら買っても良いよ。一緒に家の中にいる時は、すっぴんでいて欲しいけどね。」

「本当？嬉しい！」

結局、ファンデとルージュ、コロンを買う事になり泉は楽しそうに品定めをした。富士岡は、楽しそうな泉を見ているのが嬉しくて仕方なかった。そして泉は、コロンのサンプルを手に取り富士岡に嗅がせた。

「ね、この香りどう？」

「うーん、悪くは無いけどちょっとキツイかな。」

「そっか、じゃ、これなんてどう？」

「あ〜、いい匂い〜。」

「やっぱり。ヨシ、コレにきーめた！良いかな？」

「うん、良いよ。」

会計を済ませた二人は、ショッピングモールで泉の布団を買った後、アイスを食べながら話をしていた。

「これで全部揃ったかな？」

「うん、完璧よ。沢山買ってくれてありがとう。健太くん。」

「泉ちゃんの生活用品だからな、いって事よ。あ、そうだ。コレ渡しとくよ。」

「あー、コレ、健太くんの部屋の合鍵？」

「そうだよ。俺たち二人の部屋の合鍵だ。」

泉は頬を赤くして、楽しそうな笑顔で合鍵を受け取った。

「ね、健太くん。今晚何が食べたい？」

「うーん、ハンバーグ。」

「やっぱり、予想通りだ。いいよ、私の得意料理だからね。期待してて。」

「得意って、買ってくるんじゃないの？」

「ミンチから作ったげるよ。ソースも特製、美味しいよ〜。」

「え、そんなシェフみたいに出来るの？」

「任せといて、じゃ、食材買いにスーパーへ go !」

「go !!」

スーパーでは、泉が食材を選び 富士岡の押すカートのカゴへ入れて行く。二人仲良く食材を選ぶ様子は、他人から見るととても幸せそうで、良く似合っていた。まさかダサイ理系サラリーマンと家出少女の 歳の差カップルには見えなかった。

「何よ、ニヤついちゃって。」

「あ、ゴメン、つい。俺、実はこういうの憧れてたんだ。」

「こういうのって？」

「だから、こういうのだよ。」

「私も今 凄く楽しいよ。」

富士岡は、少し照れながら目を反らした。その仕草を見た泉は、なんとなく幸せを感じていた。

ドッサリと買い物をした二人は、富士岡のマンションへと帰って来た。

「さー、着いたぞ。荷物を部屋に運ばなきゃ。」

「エレベーターないの？」

「三階建てのこの賃貸マンションに そんな便利な物は無い！」

「じゃ、健太くん。頑張ってね。私、先に食材持って上がって、料理してるから。」

「おう！任せとけ。」

富士岡は車から買った物を部屋に運ぶ為、駐車場と部屋を五往復した。

「あー、疲れた。」

「ご苦労様でした。コーヒー入ってるよ。」

「サンキュー。泉ちゃん。」

富士岡はコーヒーを飲み終わると、買った物を袋から出してそれぞれの置き場所へ運んでいった。リビングのテーブルに置かれた二人分の食器、四畳半の寝室に並んだ二組の布団、洗面化粧台に立てられた二本の歯ブラシと泉の化粧品、そしてキッチンには二人の夕食を作る泉が居る。これらを見つめて富士岡は 目を細めていた。

「ん？どうしたの？健太くん。ご飯もうちょっと待ってて。」

「うん、その、ここで泉ちゃんを見ててもいいかな？」

「別にいいけど、ぼーっと立ってるなら何か手伝ってよ。」

「あ、うん、解った。何すればいい？」

「じゃ、キャベツ切って。」

「OK。」

泉の側でキャベツを切る富士岡、二人の肩は触れ合う程 近くにあった。

「健太くん。キャベツ切るの下手ねー。太過ぎるよ。」

「そうかな？俺、いつもこれ位に切ってるけど。」

「まあ、食べる本人が切るなら それでいいけど、ちょっとねー。」

そう言うとき泉は、包丁を富士岡から取り上げ 自分で切って見せた。

「は、早っ！しかも細くて綺麗に切れてる。」

「どーお？」

「鮮やかです！」

「やっぱり、手伝いはいいから、リビングでテレビでも観ながら待ってて。もうすぐ出来るから。」

そう言いながら泉は、頬にキスをして富士岡をキッチンから押し出した。富士岡は鼻の下をデレ～と伸ばしてリビングへ向った。

富士岡がテレビを観始めて10分程で、泉が料理をリビングに運んで来た。

「はい、お待たせ。出来たよ。」

「おお、美味そう。」

「まだ他にもあるから、運ぶの手伝ってよ。」

「うん、解った。」

テーブルに並んだ夕食は、泉お手製のハンバーグに野菜サラダ、コンソメスープとご飯だった。これらがテーブルに所狭しと置かれていた。そして、富士岡はビール、泉はノンアルコールのシャンパンで乾杯した。

「スッゲーご馳走だ。いただきまーす。」

「どうぞ、私もいただきまーす。」

「うまーい！こりゃファミレスのハンバーグとは比べ物になんないよ。」

「へへ、でしょ？」

富士岡は、まるで子供のように嬉しそうに微笑んだ。泉もまた、自分が作った料理を喜んで食べている富士岡を見るのが楽しかった。二人の夕食は、会話が途切れる事無く進んだ。

楽しい夕食が終わり、食器洗いは二人で行うのが当然のようになっていた。そして洗い物が終わると、リビングで泉が話し始めた。

「ね、健太くん。」

「なんだい、泉ちゃん。」

「化粧の事なんだけど、家で素っぴんでいる約束は、明日からでもいい？」

「うん、いいよ。今から化粧するの？」

「違う、メイキャップしてくるの。それと、私がメイキャップしてる間は絶対見に来ちゃダメだよ。」

「えっ、なんで？」

「メイキャップしてるトコ見られたらココを出て行かないといけないの。」

「えーって、鶴の恩返しじゃあるまいし。」

「とにかく、恥ずかしいから、ダメだよ！」

「うん、解った。」

泉は微笑みながら立ち上がり、リビングのドアを閉めると洗面化粧台へと向った。リビングに一

人残された富士岡は、高鳴る胸を抑えてじっと待つ事にした。

しばらくして、リビングのドアが開いて泉が入って来た。そして、言葉を交わす事無く泉は富士岡の横に座った。

「お待たせ。ど、どうかな？」

「き、綺麗だよ、凄く。それに色っぼい。」

「へへっ。そうかな？」

「うん。」

「本当の事言うとね、同い年位の女の子が化粧して街に出掛けるのが凄く羨ましかったんだ。いつも、いいなーって思ってた。それで、私は、暗い工場の中において化粧なんて一生しないと思ってた。化粧したとしても出掛ける場所や見せる人なんて居ないと思ってた。でも、今は違う。健太くんが私を救ってくれて、こんなに綺麗にしてくれたの。」

「泉ちゃん、俺、言っとくけど、誰でも良かった訳じゃ無いから！出会ったのが泉ちゃんだから、、、」

「うん、信じてるよ。私も、健太くんならって、思ったの。」

「いい匂い。泉ちゃん、好きだ。」

富士岡は、泉と唇を重ねゆっくりと押し倒した。

「あ、健太くん。お風呂未だから、今はダメ。」

「愛の絶叫マシンは、走り出したら止まらないんだ。」

「あん。」

泉と暮らすようになり、初めての月曜日を迎えた。富士岡は、今日から仕事である。夢のような週末は過ぎたのだ。

「健太くん。朝だよ、そろそろ起きないと遅刻するよ。」

「ああ、おはよう。」

「おはよう、朝ご飯できてるから。」

「あー、今日から仕事かー。なんか会社に行きたくないなー。」

「どうしたの？具合でも悪いの？」

「いや、毎週月曜日の朝はなんとなく気が重いつていう訳さ。大丈夫だよ。」

富士岡は本当は、泉と離れるのが嫌で会社を休みたいと思ったのだが、恥ずかしくて言えなかった。それに情けないところも見せたくないかった。二人は朝食を済ませると、泉は食器洗いをして、富士岡は、着替えて出勤の準備をしている。

「健太くん。そんな服装で会社に行くの？」

「そうだけど、変かな？」

「私てっきりスーツで行くのかと思ってた。」

「会社に着いたら作業服に着替えるからジーンズでもいいんだ。スーツは、出張する時だけだよ。」

「ふーん、理系の大学生が授業に出るみたい。」

「なんだよ、つまりダサいって言いたいのか？」

「うん。」

「電機メーカーに勤める技術者は、これでいいんだよ。」

「特殊な世界ね。」

「じゃ、行って来ます。」

「行ってらっしゃい。早く帰って来てね。」

泉は富士岡の頬にキスをして送り出した。富士岡は、部屋を出ても笑いが収まらず、マンションから駅に着くまでの道中ずっと半笑い状態であり、行き交う女子高生たちから不審に思われる程怪しかった。

怪しい富士岡は、会社に着くと作業着に着替え仕事の準備に掛かる。この瞬間から笑顔は消え、真剣モードに変わった。自分のデスクに着くとパソコンを起動させ、メールのチェックを行う。そして、今週のスケジュールを上司にメールで報告した。

AM11時頃、実験室で電源装置の冷却効果についての作業を行う富士岡に、上司の裾野が声を掛けて来た。

「ギーク、調子はどうだ。」

「特に問題無く進んでいます。」

「そうか、従来よりコンパクトで軽量する策は見つかったか？」

「空冷FANの見直しを図っています。」

「うむ、小型化するのは良いが、パーツの感覚を詰め過ぎて冷却効果が落ちないように注意しろ。」

「現行より小型でパワーUPできそうなFANをWEBで見つけました。」

「そうか、でもFANのパワーUPは新たな熱源増加になるからな。」

「なるほど、パワーUPより冷却効率を向上させる訳ですね？」

「そうだ、何も電源内部全域を空冷させる必要はない。発熱し易くて、耐熱温度が低いパーツを重点的に狙え。他のパーツは少し風が通る位で構わん。」

「はい、解りました。ありがとうございます。」

「ところで、富士岡。一度、外で見聞を広げるのもいいぞ。新しい発見があるかもしれない。」

「と、言いますと、出張ですか？」

「ま、そうだが。客先へじゃなく展示会へ行き、何か使えそうなパーツがないか探すんだ。」

「秋葉原へ行くんですか？」

「いや、東京ビッグサイトだ。丁度来週、エレクトロニクス製造技術展が開催される。勉強になるから行って来い。」

「はい、スケジュールに入れときます。」

真面目でコツコツやるタイプの富士岡は、技術畑に向いていた。子供頃から自宅に引きこもり、ハンダ付けをやっていたので、一人地獄な作業も苦にならなかった。また、上司からの信頼も高く将来を期待されていた。

そして、昼休み。会社の食堂で昼食を済ませた富士岡は、自販機前の休憩所でスマホのトピックス記事を読んでいると、何やら見逃せない記事を見つけた。

「何、独身男性サラリーマンを狙った少女によるサギ事件が多発しているだと？」

富士岡は、多少気になり、詳細記事を読み続けた。

「家出少女と偽って独身男性サラリーマンの自宅に泊まり、目が覚めると貴重品が盗まれているという事件が多発。へ～、かわいそうにねー。そんな酷い事する女の子もいるんだ。その点、俺の泉ちゃんは安心だ。何しろ俺達は愛し合ってるし、もう何度もSEXしたもんな。」

自分勝手な解釈で自分を納得させながら、記事の続きを読む富士岡だった。

「他の被害にあった男性は少女と数日間に及び肉体的関係を持ち、男性がすっかり信用して外出した際に盗まれたという。な、なに！そんな手があるのかよ？」

さっきまでのハツラツとした元気は何処へやら、富士岡の表情が険しくなっていた。そして、更に記事は続く。

「逮捕された少女は反省しておらず、騙される男が悪いと開き直っており、馬鹿な男には涙と笑顔で気を引き付け、体を許せば簡単に落とせると自信満々の様子だと～。」

ワナワナと怒りを込み上げながら、読み続ける富士岡。

「被害男性は、あんなに愛し合ったのに、もう何も信じられません。被害金額よりも心の傷の方

が大きいと涙ながらに語っていた。、、、」

記事を読み終えた富士岡は、顔面蒼白、心臓バクバク、血圧上昇、スマホを持つ手は震えていた。

「ま、まさか、泉ちゃんも、いや、そんな事はないはず、と思う。でも、この記事からすると俺もドンピシャ該当する。泉ちゃん、俺は信じてるよ。」

ガックリと頭を下げる富士岡のマンションには固定電話が無く、泉がケータイを持っているかどうかも知らなかった。つまり富士岡は、帰宅しないと結果が解らない事になる。果たして、自宅が愛の巣であるか、自分が被害者として明日の新聞記事になるのか、富士岡は午後から生きた心地がしなかった。

午後7時頃、残業時間の休憩中 富士岡は、思い詰めた表情でコーヒーを飲んでいた。

「どうした、富士岡。またアイデアに行き詰まったか？」

「裾野さん、ちょっとプライベートで考え事を、、、」

「そうか、彼女に捨てられたのか？」

「な、何言うんです。縁起でもない。」

「男は本気でも、女は遊びのつもりだったって事はよくあるからなー。」

「は、は、は、、、」

ロボットのような固い笑いで交わす富士岡の心中は、穏やかでなかった。

「あの、裾野さん。今日ですが、8時までには設計図面が出来そうです。出来たら直ぐメールで図面を送りますので、送ったら退社しても良いでしょうか？」

「解った。午前中までは生き生きしてたけど、昼からお前 急に落ち込んだもんな。彼女の事が心配なんだろ？帰っていいぞ。」

「はい、直ぐ仕上げます。」

なんとか8時過ぎに図面を完成させ、上司の裾野にメールを送信した富士岡は、慌てて退社した。

富士岡は会社を出てからも、泉の事が気になり天国か地獄かと自問自答していた。そして、自分のマンションに着きエントランスでオートロックを解除した。ここから階段で三階まで上るのだが、何故か足が進まない。早く事実を知りたいと急いで帰って来たのに、一步一步ゆっくりと上っていた。

「なんで、自分の部屋に帰るのにこんなに緊張しなきゃならないんだ。泉ちゃん、居てくれ。」自分の部屋の前にたどり着いた富士岡は、大きく深呼吸をして鍵を開けた。

玄関に入り富士岡が見た光景は、真っ暗でシーンと静まり返った部屋だった。それは、泉と暮らし始める前のいつもの部屋だった。

「い、ず、み、さーん。今帰ったよー。」

情けない弱い声で呼ぶが、いくら待っても返事が無く、人の気配も無い。

「まさか、そんなんっ！」

富士岡は、慌てて部屋中の照明を点けたが、泉の姿は無かった。部屋は綺麗に片付いていて物色された形跡は無い。隠しておいた貴重品も無くなっていない。洗面化粧台には泉の化粧品が残されたままになっていた。

「盗まれたのは、俺の心だけか。犯罪にはならいが罪だぞ。泉ちゃん、なんで出て行ったんだ？」

洗面化粧台に置かれたグラスには、二本の歯ブラシが仲良く寄り添うように立てられていた。それを見た富士岡は、膝を床に落とすと膝の上で両方の拳を作った。そして拳には、一つ、二つと涙が落ちた。

「泉ちゃん、サヨナラも言わないなんて、、」

と、その時 玄関のドアが開き、誰かが入って来た。

「あ、健太くん、おかえり。早かったのね。」

「い、い、泉ちゃん！！」

「どうしたの？そんなに驚いて。」

「帰って来てくれたんだ？」

「何、訳の解らない事を言ってるのよ。何かあったの？」

「な、何かって、泉ちゃんが何処かへ行ったのかと、、」

「粗大ゴミを棄てて来ただけじゃない。ビールの空き缶とか空き瓶とか、、それにあんな物暗くなってからじゃないと棄てに行けないでしょ。」

「あんな物？」

「そうよ、あ、ん、な、も、の！」

泉は鋭い流し目で富士岡を睨みつけた。

「もしかして！」

富士岡は、小走りに寝室へ行くと押入れの襖を開けた。そこには富士岡が隠しておいたはずのエッチな雑誌やDVDなどが無くなっていた。

「あー、やっぱり。」

「健太くんね〜。女の子と暮らすんだから、あんな物は処分しとかなきゃマズイでしょ。布団を片付けようとして押入れを開けたらあんな物が出てきたのよ。」

「そ、そうだな。あまりの急展開で棄てる暇が無くて、そうそう、実は俺も今夜棄てに行こうと思ってたんだ。それを泉ちゃんが気を利かせてきれて、助かったよ。」

「本当？なんだか未練があるみたいだけど、、」

「いや、そんな、全然無いって。泉ちゃんと出逢う前までは良く世話になったけど、今じゃあんな物ゴミだよゴミ！」

「解ったわ。ところで、さっき、もしかして私が出て行ったと勘違いして泣いてたの？」

「馬鹿な、泣く訳ないじゃんか。目が潤んでたのは、あくびした直後だったからだよ。」

「本当に〜？私が帰って来るなり異常な驚きだったよ。」

「あれは、その、、」

泉は富士岡の首に両手を巻き付け、向き合い潤んだ瞳で富士岡を見つめた。

「正直に教えて、健太くん。」

「実は、泉ちゃんが出て行ったのかと思って、ショックで涙が出たんだ。」

そして富士岡は、今日のWEBニュースを読んでから泉が帰って来るまでの自分の気持ちを素直に打ち明けた。

「疑ってゴメン、泉ちゃん。」

「いいよ、健太くんの涙に免じて許してあげる。健太くん、私は何処へも行かないから。」

「泉ちゃん。」

富士岡と泉は抱きしめ合い、唇を交わした。涙が混ざったキスの味は、少し塩っぱいようです。

涙して 絆深まる 恋の路

来間タロー

富士岡の勘違いから涙のキスをして、泉との仲はより深くなっていた。その翌週の朝、富士岡は、自宅で出張に出掛ける準備をしていた。

「健太くんのスーツ姿を見るの初めてだ。」

「カッコいいだろう。」

「うーん、ネクタイがちょっとオッサンぽいわね。」

「そっか？でも俺、コレしか持ってないんだ。」

「そこで、はい、コレ、プレゼント！」

泉は後ろに隠していた薄くて細長い包みを富士岡に差し出した。

「え？何んだろう、コレ？」

「話の流れからしてネクタイしかないでしょ。開けてみて。」

富士岡は、嬉しそうにネクタイを取り出し、首に巻いてみた。

「うん、バッチリ似合ってるよ。カッコいい。」

「そうか、嬉しいよ。泉ちゃん、ありがとう。」

「コレでバッチリ目立つわよ。」

「コスプレショーに行くんじゃないけど。」

「でも、アニメ展とかゲーム展とかコスプレ展とか、色々やってるって聞いたんだけど。」

「そりゃ、別の日程でやってるだけで、今日はビジネス専門なんだ。何しろ今回の展示会は、アジア最大級で1000社以上の会社が出展してて、来場者は三日間で八万人位になるそうだよ。」

」

「じゃ、レースクイーンみたいなキャンギャルは？」

「居ないと思うよ。」

「ね、東京ビッグサイトって東京の何処にあるの？」

「あまり知らないんだけど、東京から電車を乗り継いで1時間位らしい。」

「ね～、東京まで私も一緒に行っていていい？」

「えっ、何しに行くの？」

「特にないけど、原宿とか行ってみたいの。お洒落な店に街並みとか、人もお洒落だろうなって。」

「うん、いいよ。一緒に出掛けよう。」

「うん、じゃ、サッとメイキャップしてくるね。」

富士岡と泉は、静岡から東京まで新幹線に乗った。二人の会話が弾み小旅行気分であった。東京駅に着くと泉は鞆から包みを取り出し富士岡に渡した。

「はい、コレ、サンドイッチ。お昼に食べてね。」

「あー、ありがとう。助かるよ。」

「健太くん、ネクタイ曲がってるよ。はい、これでバッチリ。」

泉が富士岡の曲がったネクタイを修正してやると、富士岡は恥ずかしそうに頬を赤らめた。

「それと、他の女にフラ〜っとしちゃダメだよ。」

「絶対、しないよ。泉ちゃんこそ、ナンパされても付いて行くなよ。」

二人は、夕方6時に同じ場所で待ち合わせの約束をして別々の方向へ歩いて行った。

11時頃、富士岡は東京ビッグサイトに着いた。会場の受付で来場者登録をして、入場許可証のIDカードを貰い、展示会場に入った。10時開場というのに展示会場はスーツ姿のビジネスマン達で熱気に満ちていた。展示ブースで自社製品を出展し、訪問者に説明をして価格や納期、納品数など両社の利害が一致すれば商談成立になる。出展社は自社製品をアピールし、訪問者は何か自社に役に立つ製品はないかと探しに来ている。また、中には競合他社の製品を探りに来ているケースもある。富士岡は会場の規模の大きさや行き交うビジネスマンの人数に圧倒された。

「すげー人数と出展数だな。こりゃ一日で全部見るのは無理だ。見たい会社を絞らないと、、」そう考えながら富士岡は、会場案内地図を見ながら狙いを定めていた。普通、会場に着く前に狙いを絞っておき、入場後は速やかに目的のブースへ向かうのだが、富士岡の場合は、新幹線の中で泉と旅行気分でお喋りしていたので何も準備をしていなかった。困った奴である。

「よし、まずは空冷FANメーカーから行ってみよう。空冷FANだけでも5社も出展してるのか。近いブースから行くぞ。」

お目当てのブースの前まで来ると富士岡は少し緊張していた。何しろブースの中で製品を説明しているのは、技術部長、課長級のビジネスマンで年配層が多い。それに対し富士岡は、若く平社員である。果たして相手にして貰えるだろうかという不安を抱いていたが、しばらく展示品を観察していると出展社の方から話し掛けてきた。

「空冷FANをお探しでしょうか？」

「はい、出来るだけコンパクトで空冷効果の高い物が在ればと思ひまして、、」

「それでしたら、コレは如何でしょうか？弊社の新製品で、弊社従来比で2倍の空冷効果があります。」

出展社の担当者は、展示してあるサンプルのスイッチを入れてFANを作動させた。

「あ、結構パワーが有りますね。風圧が凄い。」

「そうですね。弊社オリジナルのハイパワーモーターを使用しています。強力ですよ。」

「でも、コレだと長時間使っているとモーター自体が発熱して、送風が熱くならないのでしょうか？」

「長時間とおっしゃいますと、どの位の時間ででしょうか？」

「15時間連続で使います。長ければ24時間の場合もあります。」

「それは長いですね。ご指摘の通りモーターですので徐々に発熱してきます。このタイプは、必要に応じて短時間で冷却する事を狙っておりますので、、、そうですね長時間のご使用でしたらコチラになります。」

「あ、今使ってるタイプと同じか、少し大きいですね。」

「用途は、どういったものでしょうか？」

「電気回路の空冷に使います。」

「電源装置ですか？」

「まあ、そんなトコです。軽量,縮小化を考えておりまして、現行サイズよりコンパクトに出来ないと採用できません。」

「それは、残念です。」

「では、失礼します。ご説明ありがとうございました。」

富士岡は、次のブースへ向かった。このメーカーは、富士岡担当の電源装置に搭載されている現行FANメーカーであり、空冷FAN業界最大手で東証一部上場企業だ。なので展示ブースも先程のメーカーより5倍位広く、訪問者の数も多く、人の隙間から展示品を覗くような格好であった。当然、担当者に質問したければ、しばらく待たなければならない。そして、このブースで富士岡が一番驚いたのは、ワイヤレスマイクを頭に付け、上手な話で判りやすく自社製品をプレゼンしている女性である。この女性は、メーカーロゴ入りのコスチュームで、何故かミニスカートとタンクトップウェアであった。更に美形でメイクもバッチリ、30人程の聞く人を熱い眼差しと極上の営業スマイルで製品をアピールしていた。

「うわ、スゲー美人。それに過激な制服だな。あんな綺麗な女性従業員が、あんな制服で仕事してるなんて、さすが巨大企業。あれじゃ、男性従業員は仕事に集中できないぞ。」

富士岡は大きな勘違いをしていた。あの服装は展示会専用で普段の制服である訳がない。また、こういう展示会ではプロの女性コンパニオンを雇ったりする。ただ、立って愛想を振りまくだけの仕事もあれば、いかにも自分が発明したかのように発表するプレゼンターもいる。さすがプロ。

プレゼンを聞き終わると別のプロが富士岡に話し掛けてきた。

「ご静聴ありがとうございました。弊社の新製品カタログは如何でしょうか？」

「あ、欲しいです。御社製品は今使ってます、新製品で何かないかなと思ってたところです。」

「ありがとうございます。弊社では環境保護を考えて、カタログはペーパーレスとさせて頂いております。」

「御社のHPで見ればいいんですね？」

「いえ、今回の展示会で発表したばかりの新製品は、未だ弊社のHPに載せていません。なのでメールで圧縮ファイルをお送りさせて頂くシステムになっております。」

「なるほど。」

「恐れ入りますが、お名刺を頂戴してもよろしいでしょうか？」

「あ、はい。今、出します。」

富士岡は、スーツの内ポケットから名刺を出そうとしたが、プロの女性に止められた。

「こちらも、環境保護を考慮して紙での名刺はいただいております。IDカードからメールアドレス

レスを伺っても良いでしょうか？」

「はい。」

そう言うとプロは、富士岡の首からかけたIDカードを手に取り、バーコードリーダーでコードを読んだ。

「あ、FLASH INC.さんの富士岡様ですね。いつもお世話になっております。後ほどこのメールアドレスに新製品カタログを送信致します。」

「はい、よろしくお願いします。ところで、実際に展示品を触って見せて頂いてもいいでしょうか？」

「勿論です。本日は開発担当の責任者が来ておりますので、技術的な事でしたら何でもおっしゃって下さい。」

「はい、ありがとうございます。」

富士岡は、じっくりと品定めをした後、技術部長と10分程話をした。そして、納期や価格については後日営業担当から連絡するという事で終わった。ブースを出ると時間は12時を過ぎていた。周りの来場者の数も減ってきたようだ。

「そっか、もうランチタイムか。俺も飯にしよっと。」

富士岡は自販機で缶コーヒーを買くと、ビッグサイト敷地内にある海が見える屋外広場のベンチに座った。そして泉から貰った包みを開けて泉お手製サンドイッチをかじった。

「あ〜、美味い〜。泉ちゃんって、本当料理上手だな。」

一人でニヤケながらサンドイッチを食べる富士岡は、実に怪しかった。サンドイッチを全部食べ終わる頃、カモメが一羽富士岡の足元に降りて来きて話し掛けてきた。

「随分楽しそうなランチだね。幸せかい？」

「ああ、楽しくて幸せだよ。」

「君は、泉ちゃんと出逢ってから変わったね。まるで別人みたいだ。以前は根暗だったのに。」

「うん、自分でも変わったと判るよ。泉ちゃんと一緒にいると嬉しいんだ。」

「人を愛する事の喜びと人から愛される幸せを、君は泉ちゃんから教えて貰ったんだよ。」

などと歯の浮くようなキザ台詞を話すカモメは居ない。ただサンドイッチの匂いにつられてやって来たカモメに、富士岡が一方向的に話し掛けてカモメと会話をする妄想をしていただけである。半笑いでカモメに話し掛ける光景は怪しさを増加させていた。

午後からも富士岡は会場内を隈なく巡り、仕事に役立つ物はないかと探し歩いた。そして、4時頃会社の上司に連絡を入れ、概略報告を行った。この時間になると会場から帰る人が多くなり、プレゼンも終了している。富士岡は、やる事は全部やったし、帰る事にした。東京駅の待ち合わせ場所に着いたのは5時半で、約束の時間より30分も早かったが、泉は既に待っていた。

「お待たせ、泉ちゃん。早かったね。」

「あ、おかえり。私もついさっき来たトコだよ。それで展示会はどうだった？」

「うん、色々発見があって面白かったよ。それとサンドイッチありがとう。美味かったよ。」

「じゃ、収穫有りだね。さ、帰ろうか？」

「あ、せっかく東京まで来たんだから、その辺でディナーにしようよ。」

「賛成！」

二人は、東京駅近くのビル20階にあるイタリア料理店で夕食を食べながら、お互いの今日の出来事を話し合った。

「泉ちゃんは、何処に行ってたの？」

「原宿をブラブラとウィンドウショッピングしてから、占いの館に行ってたの。」

「何を占って貰ったんだい？」

「ひみつー。」

「教えてくれよ。隠し事は反則だぞ。」

「大体想像付くでしょ？」

「うーん、何だろ？」

「鈍感ね〜。」

「もしかして、俺達の事？」

「せーかい！二人の相性ピッタリなんだって。」

「お〜、良かったー。なんか嬉しいな！」

「私も嬉しい。」

向かい合って座る富士岡と泉は、テーブルの上で互いの手を握り合い、見つめ合った。

二人の未来

秋になり、泉が富士岡のマンションで暮らすようになってから三ヶ月が経っていた。二人の同棲生活もしっかりと板に付き、恋人として上手くいっていた。富士岡は仕事面でも自信が持てるようになり、一人で設計から客先での実験評価、スケジュール調整などこなしていた。また、量産機のクレーム対応も上手に出来るようになった。こうなると普段の態度にも自信が現れてくるようで、以前の暗く思い詰めた表情から実に凛々しく堂々たる姿勢に変わっていた。

そんな時、上司の裾野が富士岡に声を掛けて来た。

「よっ、ギーク、調子はどうだい？」

「あ、どうも。今日も順調です。」

「うん、いいねー。ところで、先月納品したプロトタイプ(試作機)だけど、今朝ユーザー評価で合格したぞ。」

「本当ですか？」

「ああ、ここから価格交渉や納期調整が済むと正規品として採用されるぞ。早ければ来週にも正式注文が来るだろう。」

「お～、やりましたね！嬉しいです。」

「初回納品時は、設計担当者のお前が納品先に行ってセットアップに立ち会え。いいな？」

「はい、ところで出荷先はどこでしょうか？」

「台湾だ。パスポートは持ってるな？」

「はい、持ってます。」

「ところで、富士岡。お前将来の希望はあるか？」

「えっ？と言いますと？」

「だから、将来部長になりたいとか、海外赴任したいとか、ずっと技術畑で開発をやりたいとかだな、そういう意味だよ。」

「いやー、今まで考えた事も無いです。」

「つまらん事を自慢するな。お前今何歳だ？」

「25歳の入社5年目です。」

「じゃ、そろそろ自分の将来のビジョンを考えてた方が良く。10年後の自分はどうありたいか、そうなるためには何をすべきか見えてくる。」

「はい、考えときます。」

「お前だって、サラリーマンになった以上出世したいだろ？ずっと人に使われるままじゃ面白くないだろ？出世したら、社会的地位も上がり給料も増える。そしたら、将来のカミさんだって喜ぶ。お前、結婚の予定はあるのか？」

「ちょ、ちょっと待って下さい！何ですか？急に。」

「あ、いや、失敬。つい、取り乱してしまった。特に深い意味は無いんだが、イングリッシュをスタディしとけよ。」

「は、はい。英語を習えと仰るからは、何か意味が有るんでしょうね？」

「いや、これからの時代は技術者も英語が必要とされるだろうな～って、思ったりしてね。ま、あんまり気にするな。オットもうこんな時間か、じゃ会議があるからこれで失敬するよ。」

「はい。(余計気になるだろ!)」

わざとらしい逃げ方でごまかした裾野は去って行った。

午後4時過ぎ、社長通達が発表された。富士岡がパソコンの社内ネットで確認した内容は、中国、フィリピンでの海外勤務希望者を募るというものだった。

「裾野さんが英語を勉強しとけとか、海外赴任とか言ってたのはこの事だったのか。ま、いや。俺別に出世したい訳じゃないし、海外勤務したくもないし、何より泉ちゃんと離れたくないしな。希望しなきゃ関係無いや。」

そこへ裾野が走って来た。

「富士岡！社長通達見たか？」

「は、はい。たった今見たところですよ。」

「そうか、じゃ話は早い。お前どうする？行ってみるか？」

「いえ、やめときます。」

「おっ前なー、こりゃ絶好のチャンスだぞ！見逃す手はない。」

「でも、希望者を募集してる訳で、僕を名指ししてる訳じゃないでしょ。」

「そうだけど、希望すりゃ誰でもOKって事じゃないんだ。優秀で将来有望な若い技術者を送りたいんだ。」

「お言葉は光栄ですが、僕より優秀なのが他にもいると思います。」

「判らん奴だな。ズバリ言う。お前は今回の海外勤務候補にノミネートされている！」

「ええっ！マジっすか？」

「マジっす！！」

「でも、今何故、中国、フィリピンなのでしょうか？」

「ハッキリ言おう。近い将来、電機製品のメイドイン ジャパンは消滅する。」

「そ、そんな事は、、、」

「残念な事に現実になりつつある。日本の巨大電機メーカーが次々に国内工場を閉鎖縮小している。これは、円高や不況の影響だけでない。生産工場を海外にシフトしているんだ。理由は判るな？」

「日本での人件費が高く、販売価格の下落による利益減少です。」

「その通り、人件費の安いフィリピンや中国で生産した方が利益が多い。今年上期の決算でも、国内は赤字だがフィリピン中国工場では利益を増している。もはや待った無しの状態だ。他分野メーカーも同じなんだ。今日本に残っても数年後仕事があるかは保証できないぞ。お前は、将来会社の技術部門のコアとして経営サイドに回ってリードして行ける。」

「いや、あの、その。困ります。」

「何故だ？お前未だ独身だし困ることないだろう。恋人がいるなら即結婚して、ハニームーンの帰りにそのまま海外勤務地で新居を構える。いい話じゃないか。」

「あまりに急すぎますよ。(何が、はに一む一んだ)心の準備が、、、」

「お前、サラリーマンの転勤にそんなモンがあるか！突然通達が出て、行けって言われた場所に、行けって言われた時に行くのがサラリーマンだ。」

「も、もしもですよ、断ったらどうなるんでしょう？」

「クビ！とは言わんが出世はできないな。定年までの35年間干されると辛いぞ〜。」

「脅かさないで下さいよ。」

「ま、一度真剣に考えてくれ。良い返事を期待してるぞ。」

午後9時半頃 富士岡は、退社後電車の中で考えていた。「俺と泉ちゃんは、今後どうなるんだろう。いつまでも二人一緒にいたい。そうすると結婚する事になる。泉ちゃんは、俺と将来結婚してくれるだろうか？例え泉ちゃんがOKしても、泉ちゃんの両親が許してくれるかな？そういえば、泉ちゃんは、家出中だったんだ。うーん、どうすりゃ良いんだ。」

そんな時、富士岡の隣の席から 子供に物語を聞かせる母親の声が聞こえてきた。

「かぐや姫は、お爺さんとお婆さんに月へ帰る日がきましたと言いました。お爺さん達は月からの使者を食い止めようとしましたが、なす術も無くかぐや姫は、月へ帰って行きました。」

この物語を聞いた富士岡は、急に胸が締め付けられる思いがした。

「ある日突然俺の前に現れた泉ちゃんも、俺を置いていつか家に帰るんだろうか？一生家出したままなんて無いよな。それとも、将来 俺が泉ちゃんの両親に会って正式に結婚を認めて貰うしかないな。」

駅からマンションまでの帰り道、歩いてくる富士岡を待ち伏せしていたかのように 一人のスーツ姿の男が現れた。男は40歳位で厳格そうな容姿であった。

「あの、失礼ですが、富士岡さんでいらっしゃいますよね？」

「えっ、そうですが。どちら様でしょうか？」

「夜分に申し訳ありません。私立探偵事務所の者です。」

「探偵の方が僕にどの様なお話があると言うのですか？」

探偵は、すぐ近くの公園まで富士岡を連れて行き話を始めた。

「時間も遅いので単刀直入にお話させていただきます。あなたは、三島泉さんという少女をご存知ですか？」

「うっ、その、名前は聞いた事が有るような、、、」

「富士岡さん、私立探偵を甘く見て貰っては困ります。あなたは、三島泉さんと同棲している。しかも彼女が未成年で家出中という事も承知で一緒に暮らしている。そうですね！」

あまりにもダイレクトでパーフェクトに断言されたので、富士岡は言葉が出なかった。

「富士岡さん、私は何もあなたを揺すろうとしているのではありません。実は彼女のご両親から私共に捜索願いが出されてまして、調べさせてもらった次第です。ご両親はかなり心配されておいでです。一刻も早く帰ってきて欲しいと強く望んでおられます。」

「でも、泉さんはお父さんから暴力を受けて家出したんです。そんな危険な処へ帰す訳にはいき

ません。」

「お気持ちは判らなくはないですが、捜索願いが出されている未成年をあなたが保護する権利は無いはず。」

「しかし、、、」

「法律上、親の元に帰されます。あなたが無条件で直ぐに泉さんを家に帰すと約束するなら警察には通報しないとご両親は仰ってます。」

「け、警察って、捕まるのはオヤジの方だろ！泉ちゃんに散々暴力を、、、」

「その辺の事は存じておりませんが、話がこじれると富士岡さんの立場も危うくなりますよ。」

「どういう意味ですか？」

「未だ調べていませんが、そうですね、例えばですよ、18歳未満と知りながら性行為をした場合、法律上犯罪になります。ご存知ですよ？」

「ええ、まあ、知ってますけど。」

「問題が大きくなり警察沙汰になれば、新聞やネットでも報道され会社もクビになるでしょう。富士岡さんは結構良い会社にお勤めだし、勿体無いですよ。ちょっとした火遊びが火事になる前に消した方が良いのでは？」

「あ、遊びだと！冗談じゃねえ！俺達は真剣に愛し合ってるんだ。アンタに遊び呼ばわりされるスジはねえ！」

「そうですか！それなら合法的にスジを通しては如何ですか！大人として！」

「判りました。近い内にご両親に会いに行きます。」

「承知しました。ご両親にそのようにお伝えしておきます。」

話を終えた富士岡は、マンションまで走った。そして自室のドアを開けて叫んだ。

「泉ちゃん！」

「きゃ！もう、ビックリするじゃない！どうしたの？」

「じ、実は、、、」

富士岡がさっきの事を泉に話すと、泉は悲しそうな顔をした。「やっぱり、逃げられないんだ。」

泉の言葉は絶望に満ちていた。

「泉ちゃん、俺、泉ちゃんをかぐや姫にはさせないよ。月へなんか絶対帰さない！」

「でも、無理だよ。何処へ逃げてみつか見つかるよ。」

「何も逃げる事なんかない。」

「どうするの？」

「明日、泉ちゃんの家に行こう。そこで俺が泉ちゃんの両親を説得する。」

「なんて言って説得する気？」

「泉ちゃんとの同棲を認めて下さいって言うに決まってるじゃん。」

「どーかなー？それに明日会社は？」

「休む！」

「えっ、いいの？休んじゃって。」

「こんな重大な時に仕事どころじゃないよ。大丈夫、俺に任せろ！」

泉は家に電話をして明日富士岡と二人で会う約束をした。3ヶ月ぶりに聞いた母の声は泣いていて、それを聞いた泉も涙が零れた。

「私今、凄く幸せだよ。だから心配しなくて良いよ。明日絶対帰るから安心して、じゃもう切るね。」

電話を切った泉は、すぐさま富士岡の胸に飛び込み泣いた。

「私、健太くんとずっと暮らしたい！別れるのなんて嫌だ！」

「俺もだ。泉ちゃん、実は大事な話があるんだ。俺、海外に転勤になるかもしれないんだ。」

「えっ！いつから？」

「それは判んない。」

「で、もし、そうなったら、俺と一緒に来てくれないか？絶対幸せにするから、今直ぐでなくても良いから近い将来、俺と結婚して下さい！」

「嬉しい、夢みたい。私もいつか、そうなったら良いなって思ってた。健太くんと一緒なら、私何処へでも付いて行くわ。勿論OKよ。」

二人は強く抱きしめ合い、永遠の愛を誓った。

愛しくて恋しくて切なくて

今日は泉が3ヶ月ぶりに家に帰る日だ、しかも男を連れて。泉の両親は昨夜眠れず、朝からソワソワしていた。

「母さん、泉が連れてくる男ってどんな奴だろうな？」

「知らないよ、ま、父さんみたいな男じゃない事は確かだね。」

「む、どんな男だろうが、泉を騙して連れて行きやがって、会ったらタダじゃおかねえ。」

「未だ、悪い男だと決まった訳じゃないでしょ。昨日電話で幸せだって言ってたから。それに泉は男を見る目があるよ、騙されるようなヘマはしない。私は泉を信じてる。大体、父さんが原因で家出したんだからね、まずそこを反省して泉に謝るんだよ！」

「わ、判ってるよ。」

その頃、富士岡は自宅から上司の裾野に欠勤の電話をしていた。

「はい、急に申し訳ありません。一身上の都合という事で、休ませて頂きたいんです。」

「しょーがねーな。明日は出てこいよ。」

「はい、ありがとうございます。失礼します。」

「どう？休めそう？」

「うん、OK貰ったよ。安心して良いよ。泉ちゃん。」

「いよいよ、だね。健太くん、私怖いよ。」

「大丈夫、絶対上手くいく。さ、行こう。」

「うん。」

約束の11時頃、泉と富士岡は泉の自宅の前には着いた。

「なんだか緊張してきたな。」

「もー、しっかりしてよ。おまじないしてあげるから。」

泉は富士岡のネクタイをキュッと増し締めした。

「これで大丈夫。」

「ヨシ、気合い入ったぜ。」

泉が玄関のドアを開けると、涙ぐんだ母親が待っていた。泉は母親の泣いている顔を見るなり、抱きつき涙を流した。

「泉！まったくこの子は、心配したんだからね！」

「ゴメンなさい、お母さん。」

泉の母親は泉の部屋で、家出してから昨日までの事を聞く事にした。富士岡は、泉の父親から客間に通された。

「泉の父親です。昨日まで泉が世話になってたようで、。」

「始めまして、富士岡健太郎と申します。世話をしたなんて、とんでもない。僕の方こそ泉さんの美味しい手料理を毎日食べさせて貰って、お世話になっています。」

ここで父親の表情が険しくなった。父親は、昨日まで世話になったと完了形で言ったのに対し、富士岡は、世話になっていますと進行形で答えたのだ。二人の認識に大きな差があった。富士岡もまた、この差に気付いていた。

「富士岡さん、何歳？職業は？」

「25歳で、電機メーカーに務めています。」

「ほー、立派なモンだ。ウチは赤字続きの町工場でね、儲かってる会社が羨ましいよ。」

「いえ、そんな。」

しばらくの間、相手の人物像を探るような問答があり、やがて沈黙になった。そして、父親が口を開いた。

「ところで、今日は泉をウチまで送り届けてくれたんだよね？」

「お、送り届けたんじゃないくて、その、ご挨拶に来た次第です。」

「挨拶はさっきしたじゃないか。」

「ああいう挨拶じゃなくて、僕は泉さんと同棲しておりますて、今後も泉さんと、、」

「お前さん、泉とはもう寝たのか？」

思わず黙り込む富士岡に追い討ちをかける。

「そりゃ、3ヶ月も一緒に暮らしてりゃ寝たわな。お前さん、泉は未だ17だつての知ってたんだろ？こんなに若い内に嫁に行けねえ身体にしやがって、どうしてくれるんだ？」

「不適切な言葉ですが、責任を取らせて頂きます。必ず泉さんを幸せにしますので、将来泉さんと結婚させて下さい。そして、これからも僕と泉さんが同棲する事を許して下さい。」

「いーや、そうはいかねえ。泉は俺の一人娘だ。外へ出す訳にはいかん。」

「お願いします！泉さんも僕と暮らす事を望んでいます。」

「お前さん、兄弟は？」

「居ません。」

「一人っ子か、じゃ親は何歳だ？」

「僕は物心付いた時には養子に出されていて、本当の両親は何処の誰かも知りませんし、今何処で暮らしているかも、生きているのかも判りません。そして、育ててくれた両親は他界しました。」

「そうか、天涯孤独な訳か、悪い事を聞いちゃったな。」

「いえ。でも僕は、泉さんと出会って人の愛情を知りました。」

「うーん、お前さん本当に泉に惚れてんだな？」

「勿論です。」

「じゃ、お前さんウチへ婿に来るか？」

「えっ？婿養子ですか？」

「そうだ、さっきも言った通り泉は一人娘でウチの工場の跡取りが居ないんだ。お前さんは一人ぼっちで、泉と結婚したい。そのお前さんが俺の処に婿養子に来て、工場を継いでくれれば俺たち皆円満って訳だ。どうだ？悪い話じゃないだろう。」

「はあ、婿養子は良いとして、工場を継ぐのはちょっと、今の会社で働きたいし、、」

「ダメだ。婿養子と工場継承はセットなんだ。」

しばらくの間目を閉じて考えた富士岡は、答えを出した。

「はい、この話 謹んでお受けします。」

「ヨシ、決まった！おーい、母さん、泉一。話がまとまったぞ！」

泉の父親が妻と泉を呼び出し、説明をした。

「ダメだよ、そんな事 絶対ダメ！ 健太くん撤回して！」

「えっ、何で？俺、泉ちゃんと、、」

「だって、こんな工場継いだって借金の肩代わりさせられるようなモンだよ。健太くんは、今の会社で頑張ってた方が絶対良いよ。」

「あー、余計な事を、折角上手くまとめたのに。このバカ娘。」

「泉ちゃん、ありがとう。でも俺頑張るから、泉ちゃんと一緒ならどんな苦労も乗り越え、、」

「健太くんは、ウチの事知らないからそんな事言えるんだよ、絶対ダメ！」

「泉、折角ダーリンがOKって言ってくれてるんだし、なあ母さん。」

「無理じゃないかねー。」

すると泉は立ち上がり、富士岡の腕を掴んで玄関先まで引っ張って行った。

「今日までありがとう、楽しかったわ。でも、もうこれで終り。サヨナラ。」

「なな、何言ってるんだ！さっきまで、二人一緒になって、あんなに固く誓ったのに。」

大粒の涙を瞳に浮かべた泉は富士岡を押し出そうとする。

「はい、部屋の合鍵返すわ。早く出て行って！」

「泉ちゃん、、本当にそう 思ってるのか？」

「当たり前よ！出て行かないんなら、警察呼ぶわよ！」

ショックを受けた富士岡は、力も無く泉の手によって家の外に追い出された。これが父親に追い出されるなら、テコでも動かないつもりであったが、泣き叫ぶ泉に押し出されると抵抗する事も出来なかった。

富士岡を追い出した泉は、玄関に鍵を掛け足早に泣きながら自分の部屋へと戻って行った。そして、追い出された富士岡は、夢遊病者の如くフラ～っと歩き出した。

泉は自分の部屋に閉じ籠り、部屋から出てこようとしなかった。食事の時間になっても出て来ないし、呼び掛けても返事も無い。聞こえてくるのは、泉の泣き声だけであった。現実問題として泉が取った行動は、富士岡はここに留まるより今の会社に残った方が良いと考えた泉の出来る限りの愛情であった。

富士岡は自分の部屋に帰るとネクタイを解いた。泉からプレゼントされたネクタイを解くように、泉に掛けられた恋の魔法は簡単には解けそうになかった。その夜富士岡は、これが現実なんだ、恋だの愛だの所詮 非現実的なもの。そう自分に言い聞かせて、切ない時間が流れていった。

「俺は生まれて直ぐに親に捨てられ、始めて愛を知った人からも捨てられた。また一人ぼっちか。」

次の日富士岡は、決心し上司の裾野に意思を告げた。

「裾野さん、俺 海外赴任を希望します。」

「おお、決意したか。うん、良い事だ。早速人事部に連絡取るからな。」

その後富士岡と人事部との協議が行われ、話は急展開して行く。ギークとアダ名されるパソコンのハードウェアオタク富士岡は、優秀な知識と技能を持っており現地法人からすると、即戦力と考えられる人材であった。また、富士岡には親族がおらず、独り身なので直ぐにでも来て欲しいとの要請があった。

旅立ち

泉は親元に帰ってから3日間ずっと自室で泣いていた。食事もほとんど取らず、親とも顔を合わせず、呼び掛けにも応じなかった。

「泉ったら、富士岡さんが恋しくて泣いてばかり。ちょっと、父さん、何とかならないの？あれじゃ泉が可哀想すぎるよ。もう見てらんないよ！」

「じゃ、どうしろってんだ？」

「泉から聞いた話じゃ、富士岡さんは悪い人じゃないみたいだし、良い会社に勤めて収入も安定してて、何より泉の事を心底愛してくれてるらしいよ。それに泉は高校中退だし、今時仕事の中々無いんだよ。ここに居たって良い事なんて何も無いじゃない。泉のこれからの人生を考えると、私気が狂いそうだよ。」

「そんな事言ったって、泉は未だ17だぞ。嫁に出すには早過ぎるだろ。」

「思い詰めて自殺でもしたらどうすんのさ！大体アンタが原因で、、」

「わ、判りましたよ！反省してます。少し考えさせてくれ。」

「男にゃ判らないだろうけど、女にとっちゃ、恋は命より大事な時があるんだよ。一度走り出した恋は止まらないよ。私達だって若い頃そうだったでしょ。」

「そうだったよな、俺達お互いの両親の反対を押し切って結婚したんだよな。」

「あの時、もし私達が引き離されたら二人で死のうって、お父さん言ったよね。」

「そうそう、そこで母さんが、お腹の赤ちゃんの為に頑張って生きようって言ったんだ。」

「その時赤ちゃんだった泉が今、好きな男と引き離されて泣いてるんだよ！」

父親の目から大粒の涙が零れ落ちた。

「判ったよ。泉の好きにさせよう。」

両親は揃って泉の部屋をノックした。

「泉、大事な話があるんだ。開けてくれ。」

泉からの返事は無かった。

「泉、良い話だよ。お父さんが間違ってた。あの男の処へ行って良いよ。」

しばらくすると泣き腫らした目で泉が出て来た。

「い、泉。辛い思いをさせて悪かった。」

「本当に健太くんと暮しても良いの？」

「泉、お母さんに正直に教えて。富士岡さんの事が好きなんだね？」

「うん、大好き。将来結婚したいの、他の人じゃ嫌。」

「じゃ、良いよ。その代わり約束して、毎週必ずお母さんに連絡する事。良いわね？」

「うん、約束する。でも、借金はどうするの？」

「大丈夫、お父さんが死んだ時の保険で何とかなる。今は夫婦二人で食べていけるだけの稼ぎは有るぞ。すまん、泉に余計な心配掛けさせて。」

「じゃ私健太くんの処へ帰るね。」

泉は両親と抱き合い、別れを告げた。

「あ、泉、良かったら富士岡君のマンションまでお父さんに車で送らせてくれないか？」

「え、送ってくれるの？」

「ああ、お父さんは泉に苦勞を掛けてばかりだったからな、父親らしい事は何もできていない。だからせめて送らせて欲しいんだ。」

「お母さんも一緒に行くよ。」

「じゃ、お願いします。」

車で1時間程で富士岡のマンションに着いた。それまでの間、泉は富士岡との思い出を楽しそうに両親に語った。

「一番楽しかったのは、健太くんがキーボードで演奏して泉が唄うの、健太くん何でも弾けるんだよ、その日50曲ぐらい唄って、次の日喉が痛かったよ。で一番嬉しかったのは、泉の辛い気持ちを理解してくれて、一緒に暮らそうって言ってくれた時かな。」

泉達3人は緊張した面持ちで、富士岡の部屋の前に着いた。

「あ、私合鍵を健太くん返しちゃったから入れないや、どうしよう、健太くんが帰って来るまで待たないと、、」

「あ、そう、困ったね。あまり遅くまで待てないし、、」

その時、部屋の中から何やら物音と会話が聞こえてきた。

「あれ、健太くん帰ってるのかな？開けてみるね。」

泉はそう言うとゆっくりとドアを開けた。すると、見知らぬオバサン二人がせっせと部屋を掃除しており、見慣れた家財道具は何一つ残っていなかった。

「あ、あの！ここは富士岡さんの部屋ですけど、何をされているんですか？」

「何って、不動産屋に頼まれてこの空き部屋をハウスクリーニングをしてるんだけど。」

「空き部屋！？ここ、空き部屋になったんですか？」

「そうだよ、前の住居者は昨日引越してったよ。お宅達、前の住居者に用があったの？」

「そ、そんな！」

「お宅ら、前の住居者とどういう関係だったか知らないけど、ウチらは不動産屋から正式に依頼を受けて掃除してるんだけど。」

泉は膝を付き、涙を流した。両親もやり場の無い悲しみに耐えようとしていた。

「あと一日早ければ、、、、」

「泉、、」

「あ、あなた、泉さんていうんだね？」

「はい。」

「じゃ、コレはあなたへの手紙じゃないかね？」

そう言うと掃除婦は、一枚の封書を泉に手渡した。その封書には富士岡の字で、泉ちゃんへと書かれていた。

「コレは？」

「コレはね、洗面化粧台の鏡の扉を開いたところに置いてあったんだよ。イヤー、無事に受取相手に渡せて良かったよ。」

泉は息を飲んで、封書を開いた。封書の中の手紙にはこう書かれてあった。

「おかえり、泉ちゃん、帰って来てくれると信じてたよ。でも残念ながら俺は出迎える事が出来なくなりました。急に赴任先に行くようになって、家具は輸送しました。それと、赴任先へ俺が乗る飛行機のチケット(俺の隣の席)を同封します。俺は先に空港で待っています。泉ちゃんが、きっと間に合うように来てくれると信じています。富士岡健太郎。」

「け、健太くん。信じてくれてたんだ。」

「泉、それより、飛行機のフライト日時は？」

「え、えーと、今日の午後6時。中国上海行き。」

「ここから空港まで大体2時間半ってトコだ。今3時だから、ギリギリ間に合うぞ。」

「お父さん！今直ぐ空港まで連れてって！」

「よっしゃ、任せとけ！」

泉達は掃除婦にお礼を言うと、父親の車に飛び乗った。何せ時間が無い、もし間に合わなければ、もう一生会えなくなる。そう心配する泉は車中、落ち着かなかった。そして、改めてチケットを見た泉は思いがけない事に気付いた。チケットの名前が、三島泉ではなく、富士岡泉となっていたのだ。

「健太くん、待ってて、絶対行くから。」

「ちょっとアンタ、道が混んできたよ。間に合うのかい？」

「うーん、厳しいな。」

「厳しいじゃないでしょ、泉の人生が掛かってるんだよ！何とかしな！」

「判ったよ！何とかするよ。」

父親は、無理な割り込み、速度超過、信号が赤になっても突っ走るといふ乱暴運転を始めた。何度かクラッシュしそうな場面があったが間一髪で難を逃れた。そして渋滞を抜け、車の少ない直線道路に出ると空港まであと2kmという看板が目に入った。

「泉、空港が見えてきた。間に合うぞ！」

「良かった！お父さん、少しだけ見直したわ。」

「す、少しだけ、ですか、あっ！！」

「アンタ、どうしたんだい？」

「やべえ、パトカーが追いかけて来た。」

「ええっ！！ここまで来て、、」

「ここで捕まってたまるかってんだ！」

パトカーに停止を求められたにも関わらず、父親は更に加速してパトカーを振り切ろうとしたが、そこは世界に誇る日本警察、あっという間に泉達の車に横付けされた。

「コラ！！止まらんか！交通機動隊をナメてんのか！」

「頼む！空港まで行かせてくれ！そしたら、逃げも隠れもしねえ。娘の人生が掛かってるん

だよ。」

「お願い！空港まで行かせて！」

中年親父が懇願してもパトカーはシカトしたが、泉が泣いて頼むと何故かパトカーは速度を落とした。そして、空港に着いた。

「母さん、泉を頼む！」

「あいよ！アンタ、惚れ直したよ。」

「お父さん、ありがとう。カッコ良かったよ。」

「泉、幸せに、してもらうんだぞ。」

去り行く娘の背に投げた父の言葉は届かず、やがて娘の後ろ姿は涙で滲んでいった。そして、警察が父親の側に近づいて来た。

「すみませんでした。」

「事情はどうあれ、違反は違反だ。免許取消、公務執行妨害の現行犯で逮捕する。」

「はい。」

泉と母親は走って搭乗受付まで行った。

「あー！間に合った！」

「これで搭乗手続きは済みました。お預けになる荷物がございますでしょうか？」

「いえ、ありません。」

「では、出国審査が有りますので、窓口までお急ぎ下さい。」

「判りました。」

「お母さん、行かせてくれてありがとう。私幸せになりに行ってきます。」

「うん、今まで本当に悪かったね。これからは、いっぱい幸せにね。」

泉は母親と涙の別れを告げ、一人で出国審査へと進んでいった。

「パスポートを見せて下さい。」

「えっ？パ、ス、ポート？」

「はい、パスポートです。」

「ありません。」

「は？パスポートを紛失されたんですか？それとも盗難にあったとか？いずれにしても、パスポートがないと出国できませんが。」

「そこを何とかありませんか？フライトの時間に間に合わなくなりそうで、、」

「そ、そんな無茶言わないで下さい。無理です。」

「お願いします！ここを通して、飛行機が健太くんが、、」

「ちょ、ちょっと、ダメです。おーい、応援頼む！」

泉は、パスポートも持たずに出国ゲートを突破しようとしたが、審査員に取り押さえられて別室に連れて行かれた。その部屋の窓からは、ちょうど搭乗ゲートが離れて滑走路に向う飛行機が見えた。

「本来、あの飛行機に乗る予定だったんですね？」

泉に審査員の問い掛けに答える余裕は無かった。ただ富士岡の乗る飛行機が自分を残してフライトしようとしているのをじっと見つめるしかなかった。そして、飛行機は飛び立ちやがて見えなくなった。

「チケットを見せて下さい。」

泉は、下を向いたまま黙ってチケットを渡した。

「チケットをお持ちなのに何故パスポートを持ってないのですか？」

「一緒に行くはずだった人からチケットを貰ったのですが、あまりに急な話でパスポートを取る暇がありませんでした。」

「お連れの方は飛行機に乗ったのですか？」

「多分、乗ったと、思います。」

「でも、ご一緒に行こうと約束されてたんでしょう？それなのに、あなたを置いて行かれるとは思えないですが。」

「彼が行く事は決まってきました。私が間に合えば付いて行けたんです。でも、、もう、、」

「お連れの方のお名前は？」

「富士岡健太郎さんです。」

審査員は目の前に置かれたパソコンで検索をかけた。しばらくして、審査員は微笑んだ。

「富士岡泉さん、お連れの方はフライト直前に搭乗キャンセルされて、今入国審査を通られたようです。」

「ええっ！本当ですか？」

「はい。良かったですね、きっとあなたをお探しですよ。」

泉は高鳴る胸を手で抑えながら別室を出た。

総合案内カウンターで富士岡を呼び出して貰うと、僅か5分で富士岡が走って来た。

「泉ちゃん！」

泉は直ぐさま駆け寄り、富士岡に飛び付いた。

「健太くん、会いたかった。」

「泉ちゃん、きっと来て来れるって信じてた！」

「でも何で、飛行機に乗らなかったの？」

「大事な忘れ物をしてね、乗り遅れたんだ。」

「大事な忘れ物って、、」

「それは泉ちゃんだよ。泉ちゃんを残して行けないよ。」

「もー、バカ健太！飛行機ドタキャンしちゃって、会社から叱られないの？」

「うーん、とりあえず怒られるだろうな。で、事情を話せば理解してもらえると思う。」

「なんて話すの？」

「えっと、その、、」

「何よ、ハッキリ言いなさいよ。」

「だから、フィアンセがパスポートを取るの忘れてて出国出来ませんでした！」

「あー、私のせいにする気？なんだか私がマヌケみたいじゃない。」

「その言い訳が一番助かるんだよ。」

「判った、健太くんを助けるつもりで罪を被ってあげる。」

富士岡と泉は強く抱き締め合い、長ーいキスをしました。

2週間後、左手の薬指にプラチナリングをはめた泉は、なんちゃって富士岡泉ではなく戸籍上の公式な富士岡泉として空港にいた。側には富士岡健太郎、そして見送りには上司の裾野や友人の沼津に泉の両親も来ていた。

「裾野さん、見送りありがとうございます。頑張ってきます。」

「おう、今日は絶対出国しろよ、今日も戻って来たら俺はクビだよ。」

「大丈夫です。今日は忘れ物は有りません。それと沼津、色々ありがとうな。お前には本当に感謝してるよ。」

「おう、いつの間になって感じでビビったぜ。お前が泉さんと結ばれたのは俺のおかげだからな。泉さん、今度遊びに行くよ。」

「うん、その時はご馳走作って待ってます。」

「じゃ、お義父さん、お義母さん、泉さんの事はお任せ下さい。」

「うん、しっかり頼む。」

「泉、連絡よこすんだよ。元気でね。」

「お父さん、お母さん、ありがとう。行ってきます。」

二人の乗った飛行機は、雲一つ無い青空へと飛び立って行った。

END